わがまち さんぽ 第5回

坂城町の身近な話題をお届けします。

＝ 村上氏ゆかりの伝説から ＝

千曲川の流れは、今も昔も変わらず静かに坂城の地を潤しています。その川辺には、戦国の世を今に伝える「笄（こうがい）の渡し」があります。ここは、かつて舟で対岸へ渡る大切な渡し場であり、村上氏ゆかりの悲しい伝説が残る場所です。



旧木橋（千曲建設事務所ホームページより）

天文22年（1553年）、葛尾城が落城した折、村上義清公の奥方は追手を逃れ、この渡しから千曲川を渡ったと伝えられています。危険を顧みず舟を出した船頭への感謝として、奥方は髪に挿していた「笄」を贈りました。その出来事から、この渡しは「笄の渡し」と呼ばれるようになったそうです。

橋が架かり、人々が舟を利用することはなくなりましたが、歴史や伝説は地域の風景の中に今も息づいています。何気なく渡る橋のたもとにも、先人たちの勇気や思いやりが刻まれていることに気づかされます。

晩秋の風に揺れる千曲川の水面を眺めながら、この地に生きた人々への思いを巡らせるひと時も、坂城ならではの豊かな時間ではないでしょうか。歴史は遠い昔の出来事ではなく、私たちの暮らしの足元に静かに流れ続けています。

（中村（なかむら）　忠靖（ただやす））



苅屋原からの笄橋（千曲建設事務所ホームページより）

※ここでいう「笄＝こうがい」とは、本来は髪をかき整えたり結い留めたりするための棒状の髪飾りで、のちに日本刀の鞘（さや）に差す装飾金具として用いられた道具のことをさしています。

日和

九月も半ばに入ると徐々に稲の色が黄金色に染まり、稲穂はこうべをたれ、稲刈・脱穀が近いことを感じる頃となった。

今年の我が家の米作りを振り返れば、三月には春の訪れとともに、田んぼの耕運が始まった。四月には、苗づくりのすじ蒔（ま）きを行い、五月には二度目の耕運、肥料撒き、代掻き、田植と矢継ぎ早に農作業をこなす。田植が終わると、除草剤を蒔いて一段落。ここからが田んぼとの毎日の語らいが始まる。七月後半には、土用干しを約一週間行い、九月の水落しに備える。その後、再び高温障害への対応を含めた水の管理が日課となる。九月に入り、一斉の水落しを行い、稲刈・脱穀に備える。我が家の年中行事の稲刈は、九月下旬に家族全員集合し、世間話をしながら今は少なくなったはぜかけを実施している。一年の集大成として、十月上旬には、水分の基準値を満たしていればいよいよ脱穀となる。

七ヶ月に及ぶ長かった今年の米作りを終えて、新米を食すると、来年も頑張ろうと思う。春までの半年間疲労した体を休めよう。

（宮入（みやいり）　健誠（たけし））

◎発行／長野県埴科郡坂城町議会
責任者／中嶋　登　編集／広報発行対策特別委員会
TEL（代表）(0268)82-3111（直通）(0268)75-6213　FAX(0268)82-8307
E-mail/gikai@town.sakaki.lg.jp
◎印刷／株式会社シーデンス

発行責任者　議　長　中嶋　登
広報発行対策特別委員会
委　員　長　大日向進也
副委員長　塚田　舞
委　員　星　哲夫
中村　忠靖
宮入　健誠